

『平家物語』 卷第十二丹後侍従忠房追討譚における湯浅党の影響

中 桐 ゆかり

はじめに

本論は紀伊国の武士団である湯浅党の動向を探ること、『平家物語』巻第十二の平重盛男忠房が登場する説話の形成過程や諸本の叙述の変容を考察することを目的とする。主に扱うのは、延慶本第六末―三十二「小松侍従忠房被誅給事」^一、屋代本巻第十二「丹後侍従忠房出降人被誅湯浅被助事」である。『平家物語』は終盤になるにつれ、諸本で叙述の異同が大きくなる。そのなかでも、壇浦合戦後に生き残った平家一門の動向を記した一連の記事群（以下、平家残党譚）は記載の有無や叙述の相違等、各本に様々な特色がみられる。

「小松侍従忠房被誅給事」（以下、忠房譚）では平忠房が屋島から脱出した後に紀伊国の平家家人である湯浅氏の許に身を寄せたことで残党が集ったために、熊野と合戦することになる。湯浅の猛勢により苦戦を強いられた熊野別当湛増が頼朝に助けを求めたところ、頼朝は山海の守護を命じたことで湯浅方は兵糧が尽き、平家家人は落ち行く。重盛の子息は助けるといふ頼朝を信じて忠

房は鎌倉へ下向したが斬首される。『平家物語』には湯浅宗重男の宗光が維盛と対面する記事（巻第十一「維盛出家」）もあることなどから、『平家物語』における湯浅党の影響はすでに谷口耕一氏^二や日下力氏^三が指摘している。忠房譚では上横手雅敬氏^四、佐々木紀一氏^五などによる諸史料との整合性の問題、谷口氏による本文の原態の考察がある。だが、創作意図や背景は、湯浅氏が最後まで平家に忠誠を尽くす大衆受けの意識（谷口氏）、湯浅氏の活躍をする中での構成（佐々木氏）、頼朝挙兵時の熊野対湯浅の影響（日下氏）といった指摘にとどまる。

湯浅氏は紀伊国有田郡湯浅庄に起こる藤原姓の武士だが、平安末期に湯浅宗重が平家家人として史料に残る以前の動向は判然としない^六。高橋修氏^七等の論考から湯浅党は鎌倉期に御家人としての在京活動を通じて、京、紀伊国での地位を高めていることが分かっている。だが、平家を裏切り鎌倉方についた一族でありながら、湯浅氏は平家一門と関わり語られることが多く^八、非難の読みとれる説話は残されていない。好意的な叙述の形成には、湯

浅党を語る場の重要性を考える必要があるだろう。

本論では、はじめに史料との比較から忠房譚の創作性を確認する。次に、生成において明恵が果たした役割と、生成の場としての西八条に着目し、忠房譚の形成意図を考察する。最後に諸本での変容の特性を湯浅氏の所領問題と結び付けて考える。

一、忠房譚と諸史料との隔たり

まずは、忠房譚と史実との関係性を確認しておく。湯浅氏に擁立される平忠房は諸史料にはほとんど名前を残さない^八。都落後の忠房の動向は既に角田文衛氏^九、上横手氏^十、日下氏^{十一}が詳細に検討しているので簡単に確認する。

伝聞、丹後侍従忠房、去比密下向関東、為伺武衛松容之、一日比、蒙可許帰洛云々、若是小松大臣子孫、可有事歟、令称事歟

〔吉記〕 元暦元年（一一八四）四月二十八日条）

〔吉記〕では忠房は密かに鎌倉へ下って頼朝の許を得たとあるが、『平家物語』では翌年二月に起きた屋島合戦で落ちており、矛盾する。日下氏は〔吉記〕を重視して、兄弟共にもしくは前後して元暦元年に屋島から脱出し許を得て、寿永三年（一一八四）に文覚の口添えにより頼朝から安堵されていた湯浅氏^{十二}の許に身を

寄せていたと推定する。しかし、同じく〔吉記〕 文治元年（一一八五）十二月目録には、「八日……小松内府忠房、招引関東事、十六日、忠房被切首事」（本文散佚）とあり、翌年十二月に関東に下向して斬首される^{十三}。この斬首の要因が、『平家物語』に見られる熊野との合戦なのか。上横手氏や高橋氏は『平家物語』の詳述性等から合戦を史実とするが、谷口氏、佐々木氏、日下氏は、頼朝による宗重の所領安堵の書状が、忠房が斬首された文治元年をはさんで二度出されていること、湯浅党が鎌倉末期まで所領を継承していることから、頼朝と敵対したとは考えられないとする^{十四}。

諸史料、作品にほとんど登場しない忠房が湯浅党の許にいますという記事が完全なる創作とは考えにくいものの、創作性は高く、諸氏の指摘するように形成には本話で活躍する湯浅氏の関与を想定し得る。では、その生成の場や状況はどこに求められるのか。

二、湯浅党の評価を支える存在としての明恵

湯浅氏の活躍が語られる前提として注目しておきたいのは、親平家が活躍した後高倉院周辺の状況である。このことを早くに指摘したのは角田氏^{十五}で、以降、由井恭子氏や曽我部愛氏により重点的に論じられ^{十六}、日下氏が『平家物語』との関わりを示した承久の乱後に院政を行った後高倉院の乳母に知盛室と頼盛女がおり、後高倉院と北白河院陳子（頼盛孫）との間に生まれた後堀河

天皇に藤原成親女の成子が乳母として仕えている。日下氏は成子の許に維盛女が身を寄せていたことから、『平家物語』における成親像の造型や小松家の説話、知盛の役割形成への影響を推定する。確かに後高倉院周辺での平家関係の説話形成の可能性は大きく、忠房譚においても当時期の湯浅氏の情勢を把握する必要があるだろう。そのなかでも、明恵の存在は重要である。

湯浅宗重女と平重国との間に生まれた明恵は両親を早々に失い、宗重女を妻にもつ崎山貞重に養育され、治承四年（一一八〇）に神護寺僧行慈（宗重男）に就き、文覚とも親交を結ぶ。文治四年（一一八八）の出家後は東大寺に通住するが、諸所の騒動を避けて建久六年（一一九五）に紀伊国に下向して以来、度々紀伊国で湯浅宗光らの支援を受ける。入滅前年の寛喜三年（一二三二）には宗重孫湯浅景基の要請で紀伊国に施無畏寺を開創しており、生涯湯浅党と緊密な関係を持つ^{十九}。

明恵の持つ広大な人脈が京都に及ぼした影響については既に数多くの指摘がある^{十八}。明恵は建永元年（一二〇六）に後鳥羽院の院宣で高山寺を開創し、建保五年（一二二七）には守貞親王（後高倉院）に「六字経咒」を送る。承久の乱後は後高倉院の院宣により賀茂に移住し、北白河院陳子による神護寺講堂供養の導師も務め、天皇家とは良好な関係を築いている。一方で承久の乱の敗者側の女性を救済するための善妙寺を建立し、西園寺公経、九条道家らとの和歌の贈答も見られ、藤原定家等諸貴族とも広く交流

を結ぶ。

中央で広く影響を与えた明恵と湯浅党が京で接触した史料は残念ながら一切残っていない。だが、九条道家が著した『玉葉』に「自明恵上人許被送書云、先日蒙仰自紀州只今帰茲」（承元三年（一二〇九）六月三日条）とあるように、明恵が紀州に下向することは公卿の知るところである。『明月記』寛喜二年（一二三〇）一月二十三日条にも、養父崎山貞重の追善に向かう旨が伝えられ、明恵と湯浅党との関係は自明のことであった。明恵の講義には、公卿、庶民を問わず幅広い階層が参加しており、湯浅党のことを語る機会は多分にあつたと考えられる。貞応元年（一二二二）頃に後高倉院に送られた明恵の講義を集録した「光言句義釈聴集記」^{十九}には、湯浅宗重に言及する記事がある。「敬愛」を心得なければ愛染に墮落して出期が遠くなることに關して、以下の記述が見られる。

祖父ノ入道ソ（聖人ノ祖父湯浅宗重入道）オカシキ事ヲハ申、法師ニハ親近ナセソ、タ、ノキテアツカヒテアレ、心ニタカハハ、天狐ニナルカ、ムサウナルニ、ト申キ、云々

（傍線——引用者法、○は割注を示す。以下同）

宗重は法師との親密な関係が天狗や無慙といった墮落につながることを戒めた聡明な人物として評価されていると考えてよいだ

ろう。また、明恵の弟子である喜海が記した「高山寺明恵上人行状」には、宗光妻住心が鬼に憑依されて明恵と対話するなど靈威のある人物で「宗興隆壇越」として特筆される。本書は「明恵上人伝記」ほど流布してはいないが、漢文本は後嵯峨院に進上されていることから、中央貴族や諸寺院での享受が想定し得る。湯浅氏は前述の通り明恵を開山として施無畏寺を建立、弘長二年（一二六二）には、宗光男宗榮が明恵逗留地に星尾寺を建立する。高橋氏が指摘するように、星尾寺は高山寺末寺で、明恵の弟子筋を長官とする。このように、湯浅氏は、明恵との結び付きを強く意識し、積極的に主張しているといえる。講義の場に限らない中央での明恵の活動により湯浅党の評価が間接的に支えられ、後世においても湯浅党が明恵とのつながりを示すことで、湯浅党が裏切り者としての非難を受けることのない諸説話が生成されたのではないか。

三、簀屋守護人としての湯浅党の在京活動

次に生成の場を考えていきたい。湯浅氏に関する好意的な叙述からも湯浅氏と関わりの深い場を想定できる。日下氏は巻第十一「維盛出家」の宗光と維盛の対面記事の語りの場に湯浅氏が居を構えた押小路堀河の地を想定するが、忠房譚は創作性からも同列に扱えないとする。では、他にどのような活動の場があるのか。承久の乱以降、在京御家人として簀屋守護を行った西八条は示唆に富

む。簀屋とは暦仁元年（一二三八）以降幕府の管理地に順次設置された、西国御家人・西国に所領を持つ在京御家人が勤仕した詰所で六波羅探題が管轄する^{三〇}。湯浅党が警固した西八条は没官領となった平家一門の拠点で、承久元年（一二一九）以降に実朝室（坊門信清女）が出家上洛して居住し、寛喜三年（一二三二）には歴代將軍追悼のための西八条堂（後の遍照心院、大通寺）を建立する^{三一}。この地の警固の命は暦仁元年（一二三八）に出されている（五二四四号）。しかし、文永九年（一二七二）に実朝室が遍照心院の今後を定めた置文（一一〇九三号）には、

一 守護の御家人あるべき事

承久大乱のち、京中の守護をかれし時、ことにこの御所を警固せよとて、紀州ゆあさの御家人^{三二}おほせつけられてよりのち、としすてふりぬ、寺門かたふく事なくハ、守護の武士もあらたまる事なかるへし、右府將軍御影おハしませは、武家いかてかたやすくおもひたてまつらるへき、

とあり、警固自体は承久三年（一二二二）頃から文永九年（一二七二）に至るまで行われていた^{三三}。塚本とも子氏^{三三}は簀屋守護人と六波羅探題が密接な関係であること、付近住人を下人・雑掌として召し仕っていることを指摘する。簀屋守護が在京御家人としてのステータスになり、洛中での影響力を持っていること

は明らかだが、西八条の地が持つ特殊性も湯浅氏関係の説話形成に大きな意味をもっていたと考えられる。

遍照心院を建立した実朝室に関する史料は乏しく、後鳥羽院や後高倉院と従兄弟など天皇家との関わりが深い一方で、卿二位(後鳥羽院乳母)の養女となっているほか、京での活動や交友関係はさほど明らかになっていない^{二四}。西八条堂供養(『明月記』寛喜三年(一二三二)一月二十七日条)や実朝の八講(『平戸記』延応二年(一二四〇)一月二十七日条など)には多くの公卿が参加する一方^{二五}、北条政子から伊予国新居庄を与えられる(一一〇九三号)など幕府との関係も続いており、実朝室の中央における権威のあり方や影響力は今後深く追究する必要があるだろう。また、岩田慎平氏^{二六}が彼女に仕える人々を考察しているが、源仲兼の存在は注目に値する。

廿九日、……四位仲兼従者皆悉為群盜、武士雖貴之、称八条
禅尼(関東右府後家、)家警固者不出之云々、(仲兼本自有虎
狼之野心養勇士、)

〔明月記〕天福元年(一二三三)六月二十九日条)

仲兼没後に群盗となった従者が遍照心院に逃げ込み、出てこなかったとする記事だ。遍照心院が律宗寺院でアジールの性質を持つことは、細川涼一氏^{二七}が詳細に検討している。罪ある者が保

護され武士が入り込めないと認識されていた空間を湯浅党が覆っていることは、平家残党の忠房を擁立するという話型とも重なり合う部分があるのではないか。加えて宮地崇邦氏^{二八}は、『平家物語』等に見られる仲兼一族の物語に、『西八条邸の唱道者』が関わることを指摘している。中央貴族や幕府など他方面との関わりを持ちつつ、罪ある者を保護する場でもある遍照心院が仲兼同様、湯浅党の活躍を語る場としても機能していた可能性は十分にあるのではないか^{二九}。

このような明恵、遍照心院の存在が湯浅党の活動を支えたのだろう。鎌倉方に付きつつも、平家の生き残りを守る合戦譚は、親平家が活躍した時期の湯浅党の活動を正統づけると同時に湯浅党の武力を示す物語として、西八条堂を通じて広まったと考えられる。

四、平家諸本における忠房追討譚の比較

前項までは忠房譚の生成を見た。次に諸本での変容とその改変意図を考察する。延慶本、長門本、四部合戦状本(以下、四部本)、覚一本、屋代本の記述の相違を示した表をもとにすめたい。

(空欄は記述がないことを示す。)

日付	延慶本	場所	紀伊國住人湯淺 権守宗重ガ許 ……岡村ノ城、 岩野河城、岩村 ノ城	忠勝勢	和泉、紀伊國、 摂津國、河内、 大和、山城、伊 賀、伊勢、近岡 ノ平家ノ家人、 ……神崎尾藤太 舍弟足藤次、藤 比十郎、奥近三 兄弟、岩殿二郎 宗賢	降伏 方法	頼朝の甘言 宗重の降人	新首 場所	近江國勢多	頼朝の 評價	賢カリケル歎也	独自	尾藤太と須々木 の戦闘叙述
	寛門本	紀伊國の住人、 湯淺権守宗重か もと……岡村、 岩野、岩村の城	越中次郎兵衛盛 次、惠七兵衛景 清、和泉、紀伊 國……八ヶ国 に隠居たりける 平家の家人、 ……神崎尾藤太 舍弟足藤次、藤 比十郎、奥近 太、源三兄弟、 岩殿三郎宗賢	頼朝の甘言 文賢の認得	近江國勢多	「いかなる事そ や」と、人かた ふき申けり	同上、阿波民謡 太夫成良が御所 野で陣をとり、 雅経が奥房を鎌 倉へ送る						
	四郎本	元暦二年冬 紀伊國の湯 淺権守宗重 が城	越中次郎兵 衛盛次、 惠七兵衛景 清、和泉、 河内、伊 賀、伊勢、 大和、山城 の國々、平 家の家人共	頼朝の甘言	勢多								
	寛一本	紀伊國の住 人湯淺権守 宗重をたの んで、湯淺 の城	越中次郎兵 衛、上総五 郎兵衛、惠 七兵衛、飛 騨四郎兵衛 伊賀伊勢岡 國の住人	頼朝の甘言	勢多の横の 辺								
	歴代本	紀伊國住 人湯淺七 郎兵衛新 光ガ許		忠勝が自 ら陣人に	六条河原							サテコソ 湯淺ハ安 堵シテン ケレ	

屋代本を除けば、湛増の増援要請から忠房斬首までの後半の展開に目立った差異は殆どないが、延慶本、長門本が頼朝に正反對の評価を記すことは注目に値する。延慶本は湯浅方に参加する幾

内近国八ヶ国を示し、湯浅の城と家子郎等を記したうえに、「尾藤太」の活躍までも記す。長門本は延慶本の本文を踏まえながらも阿波民部大夫成良、文覚、源義経を登場させ、屋代本に至つては始どの項目が著しく異なる。これらの指摘は既に谷口氏や日下氏がしているが、その変容については簡単な指摘にとどまつてゐる。特に記述の独自性が強い延慶本、屋代本を見ていくことで、忠房譚の変容を追つていきたい。まずは、延慶本の独自記述を中心に確認する。

①和泉、紀伊國、摂津國、河内、大和、山城、伊賀、伊勢
近國ノ平家ノ家人共、一人二人來加リケル程ニ、五百余人籠
タリ。……②湯淺ニハ究竟ノ城アリ。岡村ノ城、岩野河城
岩村ノ城トテ三所アリ。……此外又湯淺方家子郎等、数ヲ
知ズ。中ニモ湯淺方甥、神崎尾藤太、舎弟尾藤次、甥ニ藤並
十郎、其養子ニ泉源三兄弟、岩殿二郎宗賢ナド……③湯増タ
ノミ切タル侍、須々木五郎左衛門ト云者、人ニモスグレテス、
ミ出テ戰ケルヲ、湯淺方甥尾藤太、大鎗矢ノ十五束アルヲア
クマデ放ツ矢ニ、五郎左衛門尉方鎧ノ押付ノ板ヲ、主ヲコメ
テ射通シタリ。是ヲミテ打手ノ兵共ス、ミタ、カハズ。(以下、
湯増の要請と頼朝の謀略)……忠房、湯淺ノ宗重方賁落レテ、
降人ニ成テ鎌倉ヘ下給タリケレバ、二位殿対面シ給テ、「都
近キ片畔ニ如形事ナリトモ、思知奉ラムズルゾト、上洛可有」

ト宣ケルニ付テ、被上ケル程ニ、近江国勢田ト云所ニテ、タ
バカリテ切テケリ。賢カリケル謀也。

特徴として、①加担する国の多さ、②湯浅の城の列記、③湯浅氏と血縁関係のない湯浅党の活躍、がある。谷口氏は③の人物比定を重点的に行い、ある程度の正確性から延慶本の記述における湯浅党に近い者の関与を指摘する。だが、②を見ていくと、必ずしも正確な記述とはいえない。まずは②の「岡村ノ城、岩野河城、岩村ノ城」を順に確認していく。「岡村」という地名は和歌山県に紀北、紀南に各々一カ所存在する。湯浅党は紀南には所領がほぼなく^{三三}紀北の現海南市岡田の岡村遺跡周辺（且来庄）も湯浅党との直接的な関わりはない。発掘調査では、中世は集落としての役割があるが城跡は発見されず、以降も岡田周辺にも城跡は見られない^{三二}。続く「岩野河城」は中世の石垣庄にあたる有田郡有田川町岩野河村辺りで、遅くとも承安四年（一二七四）以前から鎌倉末期まで湯浅氏の所領である^{三二}。当庄には湯浅宗重孫の宗基が築城したとされる「石垣城」があるが、具体的な築城年代は不明で、「岩野河城」と一致するかどうかも判然としない。最後の「岩村ノ城」は中世の宮原庄である有田市宮原町にある岩室城跡との関係がある。江戸後期編纂の『紀伊国統風土記』に引用された「寛永雜記」には、湯浅氏が築城した岩村城が皇山の持城となって岩室城に改めたとされるが、その認識が鎌倉期頃にあ

ったかは不明である。十分な発掘調査が行われていない場所もあり、断定できない部分も多いが、現時点では紀伊国の地名を考慮するものの、少なくとも忠房を擁立したとされる元暦二年（一一八五）頃の情勢を反映した記述とは言い難く、創作性が高いといえる。

その点を踏まえると、③の「神崎尾藤太、舍弟尾藤次、智二郎並十郎、其養子二泉源三兄弟、岩殿二郎宗賢」も問題を多分にはらんでいる。筆頭の「湯浅ガ甥、神崎尾藤太、舍弟尾藤次」は、「上山家蔵湯浅氏系図」^{三三}（以下、「系図」）に載る田仲庄の宗重養子の田仲尾藤知長以下との関係があるだろうが^{三四}、「神崎」という表記は気にかかる。摂津国神崎は有名だが、尾藤氏と摂津国との関係は現存史料からはわからない^{三五}。田仲庄にある同地名を指すとも考えられるが^{三六}、諸史料で「田仲尾藤」はあつても、「神崎尾藤」という表記はなく、延慶本の表記は異例である。次の「智二郎並十郎」は谷口氏が指摘するように、「系図」に載る藤並十郎親で問題ないだろう。だが、続く「其養子二泉源三兄弟」は一切分らない。湯浅党関係史料に「泉」を名乗る者はなく、「泉」なる地名は和歌山県に残っていない。藤並氏以外の源姓に木本庄を領有した宗重孫の「木本源太宗保」の流れがあるが関連性は定かでない。最後の「岩殿二郎宗賢」の「岩殿」という地名はなく、湯浅党の所領である田殿庄の誤りと考えられる。谷口氏は確実な史料がないとしながらも、宗重三男の「得田六郎宗方」

の子孫が「宗」を通字としないことから發子と考えられることを根拠に得田宗方を比定する。しかし、田殿庄は崎山氏が領有しているが、宗方と崎山氏との関係はなく^{三七}、「田殿」を名乗る流れはないため、「神崎」同様特殊な表記である。

一つ一つを検証していくと、必ずしも事件が起きたとされる元暦二年頃の情勢を反映しているとは言えない。むしろ、後世の湯浅党を正確に記してもいいのである。以上から、谷口氏の指摘する湯浅党に近い者の関与を否定するつもりはない。正確性を欠きつつも湯浅氏の所領や家子郎等を示す点に新たな意味が付加された可能性を提示したい。

次に、屋代本の記述を確認していこう。

小松殿ノ末子丹後侍従忠房ハ、屋島ノ軍ヨリ懸放タレテ、紀伊国住人湯浅七郎宗光カ許ニソ御坐ケル。如何シタリケン、此事関東ニ聞テ、熊野別当湛増ニ仰テ湯浅ヲ被攻。湛増湯浅ニ寄テ被追掃事数ケ度、サレトモ未賁落。丹後侍従宣ケルハ、「サレハトテ忠房故ニ、各ノ身ヲ空ク成シ奉ン事ハ痛シケレハ、只我ヲ都ヘ具テ上レ。降人ニ成テ切レント思ソ」ト宣ヘハ、「争カサル事候ヘキ」トテ、類ニ叶マシキ由ヲ申ケレ共、余ニ宣フ間、不及力。七郎兵衛具奉テ六波羅ヘソ出タリケル。此ノ由関東ヘ申ケレハ、「別ノ子細有マシ。急キ奉切レ」ト宣ヘハ、六条河原ニテ切り奉ル。サテコソ湯浅ハ安堵シテン

ケレ。

屋代本の全文を示したが諸本と比して極端に短い。諸本と異なり宗重男宗光が登場すること、「六波羅」へ連れて行き、「六条河原」で斬首として鎌倉の視点が殆ど失われていることは特徴的である。何より忠房自ら降人を申し出ており頼朝や湯浅氏に不利な印象を与えない。日下氏は「湯浅氏が早くから鎌倉の御家人となっていた事実と、物語の伝える湛増との華ばなしい合戦との矛盾を解消しようとしたためであろう」と指摘する。しかし、矛盾の解消を試みたとすれば、どのように矛盾を知りうる環境にあり、なぜ解消をしたのか、そしてなぜここまで異なる叙述にしたのかという点が問題となる。

延慶本、屋代本の変容は異なるものの延慶本が数多くの国、家子郎等の加勢や城を示して湯浅党の規模を主張するのに対し、屋代本も末尾に所領安堵を明示しており、両者共通して土地に言及することは注目に値する。鎌倉中後期は湯浅党の所領問題として、紀伊国阿氏河庄が大きく取り上げられる時期であり、この問題と深く関わるのではないだろうか。

五、延慶本、屋代本の叙述変容と阿氏河庄知行問題との連関性

承久の乱後に湯浅党は勢力を拡充したが、紀伊国阿氏河庄の知

行問題が在京活動にも波及していった。阿氏河庄をめぐる問題の経緯は先学の数多くの積み重ねがあるが^{三八}、今回は紙幅の関係上考察に必要な経緯を簡単に説明するに留める。

平安末期、阿氏河庄の本所は円満院門跡、領家は寂楽寺だが、長寛二年（一一六四）頃から高野山と度々相論が起きている（『平安遺文』三三〇二号）。治承・寿永の乱に乗じて元暦二年（一一八五）に高野山領となり（同四一八三号）、翌年に入庄した高野山の助光・長安を寂楽寺が湯浅宗重と組んで追い出したことで、湯浅氏と阿氏河庄との関係が始まる。宗光は建久八年（一一九七）に文覚が得た阿氏河庄下司職（九三五号）を翌月譲渡され（九三九号）、承元四年（一二二〇）に将平家政所下文により地頭職が正式に認められる（一一八九号）。嘉禎元年（一二三五）には、湯浅宗光妻住心の静法院修造の功により二代は預所、地頭職は永代与えられる（四八七八号）。だが、詳細は不明ながら二代目の男宗氏の預所は停止、正元元年（一二五九）には播磨法橋が預所となつて以降、米持王、粉河讃岐房、寂楽寺別当任快が任ぜられる。建長八年（一二五六）には高野山も阿氏河庄の所領返還を訴えはじめ、阿氏河庄をめぐる円満院門跡、高野山、湯浅氏の相論が展開される。この問題は湯浅党の在京活動にも多大な影響を及ぼしている。

北条時茂書状（八五九〇号）

湯浅二郎左右衛門尉宗業申押小路堀川地事、訴状謹進上候、子細載状、以此旨、可有御披露候恐惶謹言、

十二月六日 左近将監時茂
進上 修理大夫殿

智眼（保田宗業）申状案（一〇四〇九号）

沙弥智眼重謹言上

欲早如本返賜押小路堀河敷地一所事

副進 証文等案

右、件地者、智眼相伝之私領也、而桜井故 宮御時、為御壇所、被借召彼地、被立御壇所畢、而智眼依為在国身、指当不罷入之間、不返給而送年月畢、而御入滅之後、返給之旨、令言上之所、任快法印已沽却于他人云々、……且先日訴申之時、任快状云、件地文書、建長炎上之時、焼失之条、顯然事候、宗業母尼目筆之状、相残候案如此云々、彼屋敷事、以一旦之儀、被立御壇所之間、全不進証文之所、令焼失之条、顯然之由、令言上之条、言語道断申状也、……

文永六年三月 日 沙弥智眼（上）

湯浅氏が所有する押小路堀川の地について、宗光男の宗業が文応元年（一二六〇）に訴えており、詳細は文永六年（一二六九）以降の訴状に残されている。湯浅氏相伝の私領であった当地を円

満院門跡桜井宮存命時に御壇所としたが、宗業は紀伊国にいたためにそのままにしていた。しかし、宮逝去後に阿弼河庄預所の任

快が、建長年間の火災により文書が焼失したとして専横し売却したという。この事態は収束せず、建治元年（一二七五）には任快の十カ条にわたる暴挙が宗氏男の宗親により訴えられている。そのなかには、「一 打止八条櫛笥屋役事」（一二一八三号）と

あり、文永九年（一二七二）に実朝室によって決め置かれた薄屋、警固まで停止させられている。薄屋の停止、押小路堀川の奪取等々、阿弼河庄の問題が湯浅氏の在京基盤を大いに揺るがしているのである。事象が収束した正確な時期は不明だが、湯浅党は正応二年（一二八九）には在京結番次第が出され（一二二四一号）、さらに紀伊国内の勢力を拡充して在京活動を行っている。また、正応五年（一二九二）以降、六波羅探題より命じられる六波羅兩使や国上使に再び任命されて度々紀伊国内の紛争鎮圧に派遣される。六波羅兩使は立場の違う者二名が派遣されるが、両方とも湯浅党の場合もあり、外岡慎一郎氏^{三十九}、高橋氏が指摘するように、六波羅探題、紀伊国兩方から湯浅党の権威が認められていたと考えられる。よって一二九〇年前後には再び湯浅党の在京の権威が回復し安定期に入ったものと見たい。以上のような阿弼河庄をめぐる問題と事象により湯浅氏の起源や祖の活躍を語る機運が高まり、『平家物語』の変容に影響を与えたのではないか。湯浅氏や高野山の文書から、阿弼河庄と湯浅党との結び付きを追っていく

と関わりが見えてくる。

①金剛峯寺衆徒惣状案（八〇〇七号）——建長八年（一二五六）六月

……当山令領知行之所、寂楽寺相語湯浅宗重法師、引率二百余人勢、乱入庄内、追出当山之使者了……後鳥羽院御宇重依令奏聞、被差下官使等実檢以後、被成下院宣、彼状云、大師手印縁起之条炳焉云々、仍令入当寺使者之剋、宗重法師之末孫等、又追返入部之使者、……

②湯浅光信訴状案（八四二二号）——正元元年（一二五九）十月

当庄者、去建久八年、右大將軍家御時、親父宗光法師始令補任地頭職之以降、所務之次第于今無相違知行來之所、……

③湯浅宗親陳状案（一二一八三号）——建治元年（一二七五）十二月

……往年以来、宗光・住心・成仏・宗親四代之間、六十余年、令兼帯之条委載先陳畢、云預所根本由緒、云任快・按察房濫吹悪行、皆以先陳方上、承伏条々、

一 宗光追討本所敵対長安・助光之間、依勲功之賞、拝領預所職事、

④紀伊高野山衆徒解狀案（二二四九八号）——嘉元三年（一三〇

五）五月

高野山金剛峯寺衆徒等謹解

欲特蒙武家御裁、停止掠称地頭湯浅兵衛尉宗光跡輩等、……

……元暦御下知云、御手印内、誰可成異論哉云々、爰寂樂寺相論之間、非関東進止之地、任道理可為聖断之由、御執奏之後、雖勅裁、本下司宗光跡之輩、致濫妨之間、就經上訴、被逢去年十二月十六日御評定、如被仰出者、宗光承元四年賜御下知之後、高野山不申子細之上者、不及御沙汰云々、

⑤紀伊阿氏河庄地頭陳狀案（二三〇三七号）——徳治二年（一三

〇七）八月

……当庄地頭職者、如載先段、為平家没収之地、從被拜領文覚上人以來、承元四年、忝被補任地頭職、承久三年重預地頭職還補御下文了、……凡宗重法師忠節拔群事、右大將軍家不便仁被思食之由、忝被下御自筆感勤御所、不懸当國人奉行催促、依別仰、可致忠節之旨、被成御下文了、此上者、早任重代相統御下文之旨、為蒙御成敗、粗披陳如件、

①の高野山方の主張では、湯浅氏と阿氏河庄との関係の始まりを宗重が高野山方の使者を追い出したこととする。だが、②で湯

浅方は宗重には言及せず、宗光が文覚から下司職を譲り受けられた建久八年（一一九七）の地頭補任を正式な阿氏河庄知行の始源と認識する。更に③では宗重が行ったはずの助光・長房追討を宗光のこととして宗光を祖として意識している。その認識は高野山にも影響を与えたのか、①で「宗重法師之末孫等」としていたが、④では「地頭湯浅兵衛尉宗光跡輩」として湯浅氏の筆頭として宗光を据えているのである。湯浅氏の諸系図では宗重を祖として据えるが、阿氏河庄を踏まえると宗光を始祖とする別の意識があると考えられる。

ここで再度『平家物語』の叙述に立ち戻ってみると、屋代本の特殊性との関連性が見えてくる。宗重から宗光への変換、末尾に安堵を明示するという特異性は、阿氏河庄における宗光を祖とする認識の変化が影響しているのではないだろうか。宗光は『平家物語』内でも入水へ向かう維盛を見送る人物として好意的に叙述されている。屋代本の忠房譚はそのような宗光を新たな祖として据えて、湯浅氏の所領安堵の起源を示す説話として再編されたといえる。日下氏も指摘した合戦の「矛盾」を、宗光が頻りに止めるが忠房が自ら降人となり、宗光自ら六波羅へ連れて行くという始終湯浅方の視点に徹する都合の良い改変で解消している。湯浅氏の印象を向上させるような手の込んだ改変には湯浅氏の積極的な介入を想定する必要がある。その改変が可能な場所や時期は現段階では断定できないが、「六波羅」の記述からも簗屋守護の西

八条の地は可能性が高いだろう。

しかし、程当な宗光像の造型に対し、延慶本で宗重は頭として熊野と戦う態度に出る。増補された記述は主に湯浅党の権威を誇示するものであり、忠房の降人の要因にもわざわざ「忠房、湯浅ノ宗重ガ貴落レテ」として湯浅党に言及する。現存延慶本の元となる本が成立した延慶年間頃は、湯浅党が在京畿固、六波羅阿使、国上使派遣という再び武士としての活動が活発化してきた時期でもあり、⑤にあるように、湯浅宗重と頼朝との関係を強く示す意識も深く残っている。宗重の頃より根強くある紀伊国における権威を示す意味が含まれているのではないだろうか。谷口氏の示す湯浅氏と根来寺の関係を踏まえて検討する必要があるだろう。

おわりに

忠房追討譚の形成、変容について、湯浅氏の活動に着目して考察した。承久年間以降、勢力を拡充した湯浅党が関係する説話の形成には、明恵の活動や西八条の遍照心院が強く影響し、湯浅党は平家を襲切った一族という烙印を押されることなく物語に組み込まれていった。忠房譚はいわば、湯浅党の正統性を主張する説話であったともいえる。遍照心院は室町期も唱導性を多分にもち、律宗唱導團の一端を担っていたといえる。善妙寺とあわせて今後更に検討を加えたい。

当記事は諸本によって著しい変化があるが、変容の過程には、

阿氏河庄の知行問題による湯浅党の地位の揺らぎが深く関わり、考えられる。宗光を阿氏河庄の祖として認識する意識が屋代本に、なおも湯浅党の権威を誇示する意識が延慶本の叙述に集成されたのであろう。十分に触れられなかったが、やや時代の降る長門本の叙述も多分の問題ははらんでいる。諸本よりも史実性が低く登場人物が加筆されており、いっそうの物語化が想定できる。今後の課題とする。

注

- 一 谷口耕二「延慶本平家物語における湯浅権守宗重とその周辺」(『語文論叢』二十六号、一九九八年十二月、同「湯浅権守宗重と文覚・渡辺党―湯浅権守宗重とその周辺(二)―」(『千葉大学社会文化学研究科研究プロジェクト報告書』一〇三集、同「延慶本平家物語における維盛粉河詣をめぐる諸問題―湯浅権守宗重とその周辺(三)―」(同上))
- 二 日下力「平家物語の誕生」(岩波書店、二〇〇一年四月)
- 三 上横手雅敬「小松殿の公達について」(『和歌山地方史の研究』(和歌山県、一九八七年六月)、『和歌山県史 原始・古代』(和歌山県、一九九四年三月)、『源平争乱と平家物語』(角川書店、二〇〇一年四月))
- 四 佐々木紀一「小松の公達の最期」(『国語国文』六十七巻一号、一九九八年一月)
- 五 谷口氏らは『粉河寺縁起』第十三に登場する康和元年(二〇九九)頃の「紀伊国の在田郡湯浅の住人」である「藤原宗水」が宗重の

父かと指摘する。「上山家蔵湯浅氏系図」(後掲六所収)にも 宗重

より上の代の記載はある。高橋修氏は宗重以降の記述は信頼に足るものだと指摘するが、宗重以前は紀伊守となる人物がいるなど完全に信用はし得ない。

六 高橋修『中世武士団と地域社会』(清文堂 二〇〇〇年三月)

七 『愚管抄』、『平治物語』、『平家物語』など。

八 忠房の名が残るのは、『玉葉』安元二年(一一七六)一月三〇日条、

『山槐記』治承二年(一一七八)八月二日条、『山槐記』同年一

月七日条、『吉記』元暦元年(一一八四)四月二十八日条、文治

元年(一一八五)十二月目録、『吾妻鏡』文治元年十二月十七日

条の六例に留まる。

九 角田文衛『平家後抄(上)』(講談社 二〇〇〇年六月)

十 前掲二

十一 前掲二

十二 『平安遺文』四一六号

十三 『吾妻鏡』にも、六代・宗盛息・通盛息など平家の残党処理を

記す翌十七日条に「小松内府息丹後侍従忠房。後藤兵衛尉基清預

之」とある。十七日に一斉に追捕等をされたとは考えにくく、忠

房が当日以前に預けられた可能性もあり、預けられてすぐに処刑

される場合もあることから、『吉記』の記述と矛盾はしない。

十四 日下氏は当時行方不明になっていた義経、行家が湯浅党と結び

つづのを危惧した頼朝が、いわば「踏み絵」として忠房を差し出

させたのではないかと指摘する。

十五 前掲九

十六 由井恭子「後高倉院とその周辺」(『国文学踏査』十七号 二〇

〇五年三月)、曾我部愛「後高倉王家の政治的位置—後堀河親政
期における北白河院の動向を中心に」(『ヒストリア』二二七号
二〇〇九年十月)

十七 田中久夫『明恵』(吉川弘文館 一九八八年八月)に詳しい。

十八 野村卓英「明恵と鴨長明をめぐる人々—説話享受悲盤の一考察

—」(『文学・語学』八十九号 一九八一年三月)、田中久夫(前

掲十七)、湯之上隆「日本中世の地域社会と仏教」(思文閣出版

二〇一四年十月)など。

十九 「明恵上人資料第二」(東京大学出版会 一九七八年三月)所収

二十 簗屋の役割、場所、守護人などの考察は、五味克夫「在京人と

簗屋(上)(下)」(『金沢文庫研究』九三号・九四号 一九六三年

八月・九月)、塚本とも子「鎌倉時代簗屋制度の研究」(『ヒス

トリア』七六号 一九七七年九月)、木村英一「六波羅探題の成立

と公家政權—「浴中警固」を通して—」(『ヒストリア』一七八号

二〇〇二年一月)、野口英「仁和寺本『系図』収録『平安京図』

に見える簗屋の設置地点について」(『仁和寺研究』五輯 二〇〇

五年十二月)などがある。

二十一 以上の経緯は、細川涼一「中世寺院の風景—中世民衆の生活

と心性」(新曜社 一九九七年四月)、高橋昌明「六孫王神社は源

経基邸を起源とするか?」(『立命館地理学』二十五号 二〇一三

年)に詳しい。

二十二 寛元四年頃(一二四六)に関東から簗屋廢止が提議され、停

止の風聞があった(『民経記』十二月八日条など)ものの、間も

なく撤回されたことを木村英一氏(前掲二十)が指摘している。

二十三 前掲二十

二十四 角田文衛『王朝の残映』（東京堂出版 一九九二年十一月）、

坂口恵美子『源実朝室・本覚尼』（『権史学』八号 一九九三年）、

細川涼一（前掲二十一）など。

二十五 現存史料から確認できる八講は管見の限り四例に留まる。

二十六 岩田慎平『実朝室周辺の人々をめぐって―鎌倉前期公武関係史に関する一考察』（『紫苑』十三号 二〇一五年三月）

二十七 前掲二十一

二十八 宮地崇邦『源仲兼と法住寺合戦―平家登場人物の実像―』（『中世文学』二十四号 一九八〇年三月）

二十九 樋口大祐氏（『乱世』のエクリチュール転形期の人と文化）（『森話社』二〇〇九年九月）は法華寺の律宗唱導園について言

及している。遍照心院も律宗寺院として唱導性をもつことは、岡山真空や八景戒の存在、室町期の活動から明らかである。このことは稿を改めて述べたい。

三十 湯浅党の所領変遷については、高橋修氏の研究に詳しい。

三十一 「近畿地方の中世城館」（『東洋書林』二〇〇二年九月）、『海南市内遺跡発掘調査概報―平成十九年度―』（『海南市教育委員会』二〇〇九年三月）

三十二 「昏黒若湯浅入道堂、石垣井広庄送雑事、又宗重法師送葉子雑案」（『吉記』承安四年（一一七四）九月二十五日条）と、石垣

庄と広庄が雑事を、宗重が墓子を経房に送ったとある。

三十三 前掲五参照

三十四 谷口氏は「尊卑分脈」に載る尾藤知宣、尾藤知景を比定する。知宣は頼朝に紀伊国田仲庄・池田庄、信濃中牧を安堵される（『吾妻鏡』寿永三年（一一八四）二月二十一日条）が、「尊卑分脈」

では知宣曾孫の知信が「池田太郎」と号し、池田庄に土着したと考えられるものの、当庄は湯浅党には組み込まれていない。弟知景は頼朝入京時の先陣随兵（『吾妻鏡』文治六年（一一九〇）十一月七日条）となり、男景綱が北条泰時の家令になり鎌倉で権威を持つ。両統と湯浅党との関わりは不明だが、「知」の通字からも何らかの関係は想定しうる。

三十五 岡田清一「御内人・尾藤氏」に就いて（『武蔵野』五十二巻二号）では、尾藤氏が御内人となった後の所領として、日向国臼杵郡田貫田、相模国山内庄尾藤谷を挙げる。

三十六 「高野春秋編年輯録」巻四、「元亨釈書」には第十二代高野山検校明賢、十四代良禪、十九代琳賢の出生地として記される。

三十七 「系図」によれば、宗方孫が「崎山宗樹」に嫁いでいるが、それ以前の関係は読みとれず、田殿庄は最終的に宗光流湯浅氏に継承されることから、関連性はないといつてよいだろう。

三十八 仲村研『莊園支配構造の研究』（吉川弘文館 一九七八年七月）、河野通明「阿氏河莊の百姓・公文・地頭」（『ヒストリア』一九九号 一九八八年六月）、黒田弘子「ミミヤキリハナヲソギ」―片仮名書百姓申状論（吉川弘文館 一九九五年三月）、高橋修

（前掲六）

三十九 外岡慎一郎『武家権力と使節遣行』（同成社 二〇一五年五月）

〈使用テキスト〉

延慶本＝北原保雄他『延慶本平家物語 本文篇』（勉誠出版 一九九〇年六月）

長門本＝麻原美子他『長門本 平家物語』（

(勉誠出版 二〇〇五年十月—二〇〇六年六月)

四部本『高山利弘』訓読四部合戦本平家物語

(有精堂出版 一九九五年三月)

屋代本・覚一本『麻原美子他』屋代本高野本対照平家物語

(新典社 一九九〇年五月—一九九三年六月)

吉記『史料大成 吉記』(内外書籍 一九三五年四月)

明月記『明月記』(国書刊行会 一九二二年二月)

玉葉『玉葉』(思文閣出版 一九八四年七月)

(なかぎり ゆかり 神戸大学大学院人文学研究科)

研究室受贈図書雑誌目録Ⅱ

大阪大学 日本学報(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室)

三四

大妻女子大学紀要 — 文系 — (大妻女子大学) 四七

大妻国文(大妻女子大学国文学会) 四六

岡山大学 国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 二九

香川大学国文研究(香川大学国文学会) 三九

学芸 国語国文学(東京学芸大学国語国文学会) 四七

学習院大学國語國文學會誌(学習院大学國語國文學會) 五八

学術研究 — 国語・国文学編 — (早稲田大学教育学部) 六三

学大国文(大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講

座) 五七

活水論文集 現代日本文化学科編(活水女子大学) 五六

活水論文集 文学部編(活水女子大学) 五八、

金沢大学 国語国文(金沢大学国語国文学会) 四〇

かほよとり(武庫川女子大学大学院文学研究科国語国文学専攻院

生研究会) 一五

北九州市立大学 文学部紀要(北九州市立大学 比較文化学

科) 八四

北九州市立大学文学部紀要(人間関係学科)(北九州市立大学文

学部) 二二

九州大学言語学論集(九州大学大学院人文学科研究院 言語学研

究室編) 三五

紀要 言語・文学・文化(中央大学文学部) 二五四、二五五

京都教育大学 国文学会誌(京都教育大学国文学会) 四二、四三

京都語文(佛教大学国語国文学会) 二一

京都大学 國文學論叢(京都大学大学院文学研究科国語学国文学

研究室) 三三、三四

京都府立大学学術報告 公共政策(京都府立大学) 六

京都府立大学学術報告 人文(京都府立大学) 六六

近畿大学日本語・日本文学(文芸学部文学科日本文学専攻) 一七

金城日本語日本文化(金城学院大学日本語日本文化学会) 九一